

『食と宗教』

女子短期大学部 村野宣男

はじめに

食は人間が身体として生きるための最も基本的なことであり、宗教は人間が精神として生きるための最も根本的なものである。食と宗教の間には、調和的であれ対立的であれ、古来、密接な関係が見られる。本論では、古代・未開宗教に見られる原始宗教（アニミズム）とキリスト教や仏教のような高等宗教における食に関する観念を比較しつつ宗教学的立場から問題の考察を試みる。

1. 宗教学の立場

宗教学は仏教やキリスト教のような特定の宗教の観点からではなく、古代や未開社会における原始的宗教まで宗教全体を視野に入れて、“宗教とはそもそも何であるか”ということに関心を持つ。主観的に関わることを常とする宗教を客観的に捉えようとするのが宗教学である。すでに、18世紀に宗教学の萌芽が見られるが、19世紀半ばになって確立された比較的新しい学問である。宗教を客観的に見ることによって、科学や道徳と宗教の関係、すなわち理性と宗教の関係を考察することができる。

2. 宗教とは

人間は動物のように環境に対して単に感覚的・本能的に反応するのではなく、環境を対象として問題化する。ここに、思考があり意志的行動があるが、同時に自己の能力に関しての限界性の意識を持つ。したがって、動物には存在しないところの不安や絶望を持つ。ここで人間は絶対的力（宗教的对象）にかかわることによって不安や絶望を解消しようとする。このような行為が宗教的であり、宗教的行為によって人は精神的安定すなわち救済を得る。宗教は大別して原始宗教（アニミズム）と高等宗教とがある。

人間は、花を見て‘美しい’と感じるように、何らかの対象に関して‘神聖’なる感情を持つ。この神聖なる対象は超越的力を持つのであり、この力は救済の働きを持つ。したがって、宗教は感情的能力の発現を持って始まると言うことができる。しかるに人間の精神は、非反省的か反省的かの二つに大別することができ、それぞれの態度にしたがって、神聖なる対象あるいは内容は全く異なる様相を持つ。非反

省的（反省的）精神にはアニミズムが、反省的精神には高等宗教が対応する。すなわち高等宗教には、感情的能力の発現と共に、反省的態度が要求される。

人間は動物と異なり、思考がありそこから不安や絶望が生じるのであるが、自己の思考そのものを自覚しているとは限らない。自覚の無い場合非反省的であり、自覚の存する場合が反省的である。自覚のない場合は、宗教的対象とのかかわりは感情的・自己中心的である傾向を持ち、自覚のある場合は理性的・道徳的となる。非反省的宗教が互いに対立し閉鎖的であるのに対して、反省的宗教は人間普遍的理性に目を向けるがゆえに、開かれており相互理解的である。宗教には非反省的形態が存するのであり、これが多くの問題を引き起こすのである。

歴史的に見て、科学的知識の成立は西洋近世を待たなければならなかったが、精神的領野における反省的思考法は早くから成立した。ここに、アニミズムの閉鎖性から脱却したところのギリシア思想（ソクラテス、前470～399）、ギリシア思想の影響の下のキリスト教、インドにおける仏教（釈迦、前463～383）のような高等宗教が成立するのである。高等宗教ではアニミズムでは覆われていた深い世界がより現実的なものとして展開されているが、そこに生ずるところの問題もより深刻な相を呈する。苦はアニミズムにおいては形而下的・現世利益的であったものが高等宗教では形而上的・精神的なものとなっており、アニミズムでは見られない道徳的罪あるいは煩惱が問題となる。ここに高等宗教における救済の課題がある。

3. 食と宗教

食は人間が身体として生きるための最も基本的なことであり、宗教は人間が精神として生きるための最も根本的なものである。食と宗教の間には、調和的であれ対立的であれ、古来、強い関係が見られる。

食と宗教というテーマを扱う場合も、原始宗教としてのアニミズムと高等宗教という二つの観点が必要である。アニミズムでは自然の中に神を見、自然と人間を調和的なものとして捉えるために、食と身体と霊は一体のものとして捉えられ、食を通しての神的霊とのかかわりが求められている。また、食が欠乏する場合には神的なるものへ祈願するという実際の・現世利益的思考法が見られる。一方、高等宗教では形而上的精神に目が向けられるために、食は消極的・否定的要因として捉えられる。身体は欲望の場であり、精神を混乱させる。身体の基である食も否定的に見られ、断食や禁欲思想が生まれる。

Ⅰ 原始宗教（アニミズム）と食

原始宗教（アニミズム）においては、宗教とのかかわりは非反省的（感情的・功利的）である。アニミズムの信仰は、人間の能力の限界を霊の力によって補おうとする呪術的形態を基本とする。特に食に関しては、社会的紐帯が共食によって支えられていること、食に関しての霊的タブーの問題が取り上げられる。

1. 共食の思想（食と身体と霊の一体性）

現代では身体と精神はまったく別の次元に属するものであり、精神は形がなく、捉えどころのないものとして考えられている。しかし、古代の人はこのような抽象的な考えを持つことができず、霊は幽霊のように形あるものと考えた。あるいは影のようなものであるともされている。デカルト（1596-1650）によって規定された近代的概念である精神（mind）はアニミズム的概念である霊（soul）と区別される。

アニミズムでは霊と身体の両者は実体的に異なる次元に属するものではない。食も身体も霊も同次元に属するのである。したがって、人々が同じものを食するということは同じ身体あるいは同じ霊を持つこととなる。神道では直会（なおらい）といって神に供えた神酒（みき）や神饌（しんせん）を共に食する（共食）慣習があるが、ここでは神の霊と人々の霊が共通の食によって一体となるという思想が見られる。オーストラリアではトーテミズム（totemism）という信仰形態があり、ある種の動植物（たとえば、カンガルー）が神聖なものとされ、普段は食べるのが禁じられている。しかし、祭りのときには食べられることにより、人間と神とは一体となるのである。キリスト教にはパンはキリストの体、葡萄酒はキリストの血であるとしてパンを食し葡萄酒を飲む儀礼（カトリックではミサ、プロテスタントでは聖餐式という）があるが、ここでも共食の思想が背景となっている。神との共食にはそれにかかわる人々に超越的一体化が形成されるという社会的意義が見られる。なお、共食の思想は人間自身が食の対象となるときに食人（cannibalism）となる。しかし、死者との一体化を図るために灰を食するという例は見られるものの、いわゆる食人という習慣はなく、政治的偏見であるとされている。（注1）

2. 禁忌（タブー）について

直会においては食物は霊的なものへの単なる媒介的役割を果たす性格を持つのではなく、食物そのものが聖なるものであると考えられている。すなわち、神にささげられる食物は、それ自身神聖であるからささげられるのである。直会は米の初穂を神にささげ共食するところの新嘗祭（いなめさい）を原型とするのであるが、初穂それ自身が神聖なものである。広義には農産物ばかりでなく海産物の初物（は

つもの)も初穂とされ神聖なるものとして神にささげられる。初物は神聖なるがゆえに、神にささげられることなしに食してはならない。このような宗教的禁止を禁忌(タブー,taboo)という。現在でも、朝、お茶と米はまず仏壇に供える習慣が見られる。

神聖なるものは畏れ多いゆえにタブーとなるのであるが、神秘的な力を持つもので単に恐ろしいからタブーとなるものがある。すなわち穢れているからである(宗教の悪魔的側面)。インドの伝統的宗教であるヒンズー教(印度教)では、牛は神聖であるゆえにタブーとされているが、ユダヤ教やイスラム教では豚は穢れているからタブーとされている。インドでは階級を区別するカースト制度が見られ、異なったカースト同志の共食はおろか食器を共にすることも避ける。何ゆえに、特定の食物がタブーとされるかは詳らかではないが、共同体が食に関してタブーを持つことによって共同体意識が形成・強化されるとの指摘がある。卑近な例で言えば、それぞれの家庭はそれぞれの食のタブーを持っているに違いない。

共食もタブーも理性的(科学的・道徳的)根拠を持たないが、統合的役割を果たしている。共食においては共同体の統合が見られる。タブーはその是非は別として、何らかの秩序の形成に関わる。社会的統合は人間にとって大きな課題であるが、アニミズムにおいては、このように自然形で解決されているのである。宗教は個人的ばかりではなく、社会的にも大きな働きを持つことに注意しなければならない。

II 高等宗教と食

高等宗教においては、反省によって眺められた世界に関心をもち、そこでの魂の救済を求める。人間が完全に宗教的・超越的立場に至るならば、もはや形而下的な食を問題とすることはないのであろう。しかし、そこにいたる道は厳しいものであり、いわゆる修行の場がある。そこでは、人間の生と欲望の根底であるところの食は大きな課題となる。このような視点から、高等宗教における食の問題を考える。

1. 何を食するか(菜食主義と禁欲主義)

身体・精神活動は生命の働きであり、生命の働きは食に支えられていることを反省するとき、食は重要性を帯びてくる。自己の生命を支えるために、他の生命を犠牲にするということに思いを致すときには、必然的に肉食を避ける方向が生まれてくる。特に宗教生活に専念する人々、たとえば修道院とか禅堂にいる人々は肉食を避け、菜食主義者(vegetarian)となる。しかし、いかに菜食主義者とはいえ、植物も生命を持つのであり、生命の犠牲の上に生命を維持するという矛盾は最後まで

残る。

日本の食生活では明治維新にいたるまで肉食が避けられ、いわゆる菜食主義的であったことは興味深い。日本の菜食主義は仏教と関係付けられる。仏教は、6世紀半ば(574or552)に伝えられたと言われるが、最初は呪術的意味を持っていた。しかし、聖徳太子(574-622)に代表されるように仏教の内面にも目が向けられるようになり、天武天皇は675年に、肉食禁止の詔を出した。これは、奈良時代における仏教的政治統治のさきがけと言える。その後、武士の間では肉食がなされることがあり、室町時代にはヨーロッパ人の渡来による肉食の流行があるなど、厳密に肉食の禁止が守られたわけではないが、日本人の食生活は大方において、肉を避け魚に動物性蛋白質を求めることにあったことは間違いない。ベジタリアンにもいろいろあり、純粋に植物食品をとるものはpure vegetarianあるいはveganと呼ばれている。魚をとるものは、fish vegetarianとされているが、この意味では日本人は明治維新に至るまでベジタリアンであった。

古来、反省的思考法として、身体は精神の妨げとなるとされる。身体は欲望の源であると考えられるからである。古代ギリシアのソクラテスによれば、哲学的知によって精神を身体の束縛から解放しようと考えた。仏教も知による執着からの解脱を説いている。したがって、身体活動の源である食を断つことによって精神の浄化を図ろうとする考えが多く見られる。キリスト教では復活祭に先立つ40日間(四旬節)(注2)、イスラム教ではラマダーン(Ramadan)(注3)と呼ばれる一ヶ月間の断食(節食)の慣習がある。仏教では、修行僧による木食行あるいはまったく食を断ち死を迎えることにより即身仏になるとする土中入定という形態がみられる(注4)。断食は、精神に緊張感を与え、感覚を鋭くさせる効果がある。また、共同体による断食は、共同体による食と同様に共同体意識を形成し高めるのである。

2. 如何に食するか(食の作法)

食するに当たって、いかなるマナーを持つかということは精神生活にとって大きな問題である。特に、食は日常的な事柄であるので、なおさら重要である。たとえば、食前食後の言葉には生命を維持できることの感謝の意がこめられる。日本において、食前・食後における‘いただきます’‘ご馳走さま’は仏教・神道共通であるが、神道では合掌の代わりに拍手を打つ。宴会のことを‘打ち上げ’と言うのはここに由来する。

禅堂では、精進料理が供される。精進とは悟りを得るための具体的手段とされる八正道(正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正定)の一つであり、正しい努

力・忍耐を意味している。キリスト教の修道院においても、肉食を禁じるなど節制した食生活がなされている。しかし、禅堂では飲酒は不飲酒（ふおんじゅ）として禁じられているのに対して、修道院では葡萄酒が節度を限って許される。禅堂・修道院ともに、食するに当たってのマナーが厳しく定められている。

3. 食に関する究極的反省的態度

食は生命の根源であるからこそ、人間関係において食をめぐるエゴイズムに陥ってはならない。自己のために他者の生命を犠牲にしてはならないからである。高等宗教には必ず自己犠牲の考えが見られる。キリストの死は、人間を原罪から救うためであるとされ、ジャータカ物語では、釈迦は前世において他者を救うために自己を犠牲にした物語が多く語られている。生命・身体・精神は哲学的にも難しい問題であるが、人間は第一義的に精神的存在であり、精神をないがしろにして生命や身体を維持しても意味あることではない。しかし、人間の心には自己中心主義（エゴイズム）が巣をくっており、煩惱や罪にまみれているのが通常である。ここに、人間の究極的苦がある。宗教の目的はこのような苦からの救済である。

おわりに

二つのまったく異なったものの見方がある。一つは感性に基づいた非反省的・主観的な見方であり、他の一つは対象から一步距離を置いた反省的・客観的な見方である。たとえば、一人の人間をこの二つ観点から見ると、まったく別様の相を呈するに違いない。第一の見方はある意味では現実であるかもしれないが、第二の見方によって隠されていた真の姿が見えてくると考えられる。

宗教に関しても同様のことが言えるのであって、非反省的・主観的に形成された宗教はアニミズムであり、反省的態度において形成された形態は高等宗教である。アニミズムの世界は感性的現実であるといえるが、反省はそれまで隠されていた精神のより深い現実を顕にするのであり、まったく相貌をことにする世界が展開する。

食と宗教という問題を考えるに当たっても、この二つの見方をする必要がある。アニミズムと食の関係を見ると、食は反省的コンテクストに置かれないゆえに感性的・功利的脈絡に置かれる。食と身体と神との一体化あるいは食のタブーの設定は感性的になされるのであり、食のために神に祈願したり、食をささげることによって神からの恩恵を得ようとする場合は功利的（現世利益）である。非反省的であるゆえにきわめて形而下的なかかわりが生まれている。一方、反省的・高等宗教の場合には、形而上的・精神的性格（理性的性格）を帯びる。たとえば、道徳における罪

や執着の問題が生まれ、罪や執着を持たざるを得ない人間の絶対的限界性が自覚される。アニミズムにおいて苦が問題となるとすれば、高等宗教では苦悩が問題となる。高等宗教における教義や修行は、この苦悩からの解脱を目指しているのである。

反省的観点から食が問題となる時に、断食や禁欲主義があるが、これらは一歩間違えるとアニミズム的思考と同じになることに注意しなければならない。断物(たちもの)とって、何らかの願い(仕事、健康等)を成就するために、本人ならびに他者が茶・酒・タバコ等の嗜好品を断つ風習があるが、これは禁欲によってもたらされるなんらかの霊的力によって目的の成就を期待するアニミズム的思考に外ならない。この場合精神は、自己中心主義あるいは執着の中にある可能性がある。真の禁欲は、道徳的自己犠牲、すなわち執着を離れること自体を目的とするのでなければならない。

最後に、アニミズム的世界観について一言付け加えたい。アニミズム的世界観は人間と自然を生きた形で強く結びつけるものであり、大きな意義があるといえよう。しかし、アニミズムの見方を評価するためには、一度その外に出て、反省的になることが必要である。自然を神秘的であるとするのも、反省なしにアニミズム的観点からすると、科学的合理的に自然を理解した上でなおかつ合理的には解釈されない部分が自然にはあり神秘的であるとするのとでは大いに異なるのである。また、真に反省的になるときは、禁欲主義も乗り越えられるのではなかろうか。禁欲も一種のこだわりであり、いまだ真の精神的開放(解脱)に至っていないと考えられるからである。真の反省的態度は包括的性格を持つのであり、形而下的なるものも取り込むものと考えられる。すなわち、食に関して食の美味を楽しむということ自体は否定されるべきことではない。美味を楽しむという行為が、自己中心的となり他者を傷つけることになるときに否定されるのである。したがって、しばしばキリスト教に見られるように禁欲的であること自体を目的とすることは問題である。反省的であり、なおかつ形而下的世界を受け入れる立場が人間にとって自然であると考えられる。古代ギリシア思想あるいは仏教にはこのような包括的思想が見られる。

[注]

注1. W.アレンズの『人食いの神話』によると、一般言われるところの人食いは事実ではなく、一種の政治的デマゴグであると言う。アメリカインディアンは人食いの風習を持つところの道徳的に未開の民族でありキリスト教に改宗する必要があるというのが、大陸征服の理念とされたのであると主張される。アレンズの主張に対して食人が事実であったとする反

論がマーヴィン・ハリスからなされている。しかし、ハリスは食料のために人狩りをする例を挙げておらず、戦争あるいは事故による死者が食料に供されたとする（戦争の場合は捕虜が含まれる）。パプアニューギニアのフォレ族の特に女性にクールー（kuru）と言う神経性の奇病が流行したことがある。これは、女性が病人の死体を食べたことが原因であるとされ、ノーベル賞受賞者のガジュセク（Gajdusek）の研究対象となったために信用された。しかし、食人の事実が確証されておらず、信憑性かけるとアレンズは主張している。また、ここではあたかも女性が食人鬼であるかの印象を与えているが、ニューギニアでは女性と男性が分離して生活する慣習があり、これが女性に多く発症した原因であるとしている。

注2. 復活祭・四旬節・カーニバルは互いに関連しているが、やや錯綜する。復活祭（イースター、Easter）は、キリストが十字架にかけられ処刑されてから三日目に復活したとされる日であり、クリスマスに次いでキリスト教の重要な祝祭日である。キリストは金曜日に処刑されたゆえに三日目は日曜日であるが、この日曜日は春分の次の満月の後の最初の日曜日として特定されている。四旬節（Lent）は、復活祭の前の40日間を言う。この間断食として、肉を断つか節食をする。日曜日は断食をしないので、8週間前の水曜日に四旬節は始まる。これは、イエスが荒野で40日40夜断食をしたのに倣っている（マタイ、4：2）。四旬節に入る前の三日間、肉を授ける神に感謝するのがカーニバル（carnival）である。これは、定期的に2月中旬にあたり、冬の悪霊を払い春を迎える意味があり、日本の節分と似ている。

注3. イスラム教では月の運行による暦である太陰暦を用いているが、第9番目の月をラマダーンと言い、この月一ヶ月間の断食がなされる。太陰暦のゆえに、季節は一定しない。日の出から日没まで、一切の飲食（含喫煙・性行為）を断つ。ただし、病人や妊婦は除外される。この月になされる善行には功德が多いとされる。ラマダーンのあけた日には断食明けの祭りがあり、晴れ着をまとい、ご馳走を供し、プレゼントを交換する。

注4. 五穀（米、麦、粟、黍、豆）を断って、木の実や草の実を食す修行を木食といい、修行者は木食上人と呼ばれ尊崇を受けた。山形県の出羽三山（月山、羽黒山、湯殿山）は古来、山岳信仰として有名であるが、湯殿山の本地は大日如来であり、ここでは断食を行いながら即身仏として生きながらに入定（成仏）する土中入定という慣習が見られる。すなわち土中入定をなさんとするものは、まず木食行によって身体を清める。3メートルほどの穴を掘り石室が作られるが、そこに呼吸のために節を抜き先が地上に出るようにしてある竹筒が設置されている木棺を置く。入定するものはその中で、鉦をたたいて経を読むが、聞こえなくなると入定したこととなる。本明寺の本明上人（1683）が最も古く、明治維新までこの慣習があった。

参考文献

食の思想、熊倉功夫、石毛直道 編、ドメス出版、1992

哲学・宗教・科学の観点から一般的に論じられている。食の文化フォーラムの内容で、討論が含まれている。

食の文化史、大塚 滋、中公新書、2001

西洋と日本の食文化を比較して、魚、肉、野菜、醤油などについて具体的に説明する。

人食いの神話、W.アレンズ、岩波書店、1982

食と文化の謎、マーヴィン・ハリス、岩波現代文庫、2003

被差別の食卓、上原善広、新潮新書、2005

アメリカ、ブラジル、ネパールなどの被差別民族の食生活について語る。カースト制、インド教の牛のタブーなど宗教に関係する記述がある。

禅と食、小倉玄照、誠信書房、2000

禅堂における精進料理について、その宗教的意味、作法等について述べられる。

「まつり」の食文化、神崎宣武、角川選書、2005

正月、盆、節供等のしきたりと食についてのわかりやすい説明がある。

仏教物語ジャータカをよむ 上下、田辺和子、NHK出版、2005

NHK宗教の時間のテキストで、ジャータカについて平易な解説がなされている。ジャータカは釈迦（BC.463～BC.383）没後200年頃に書かれたもので、釈迦が生まれる前、過去において見聞したことあるいはなしたことについて書かれている。教訓的内容もあるが、釈迦自身が命を賭けて救済する物語を含む。旧約聖書のアブラハムとイサクの話を想起させるものもある。仏教には命を賭けて真理を追究する思想が見える。例えば、法華経の勸持品では「我不愛身命 但惜無上道」（われは、身命を愛せずして、但、無上道を惜しむなり）と言われる。

ベジタリアンの世界、鶴田 静、人文書院、1997

自らがベジタリアンである著者は、ベジタリアンの基本思想、西洋におけるベジタリアンの系譜を語る。ベジタリアンの精神たるものが溢れ出ている書物である。